

大学も街も  
魅力がいっぱい

## 特集

特集1  
「弘前大学で学んで良かった」と  
思われるような大学を目指して

国立大学法人弘前大学 理事(企画担当)・副学長 吉澤 篤

特集2  
被ばく医療を通して  
地域貢献する弘前大学

国立大学法人弘前大学 副学長(被ばく医療・COI担当) 柏倉 幾郎  
放射線安全総合支援センター事務局長/学長特別補佐 藤岡 正昭  
医学研究科 救急災害医学講座 教授/高度救命救急センター長 山村 仁  
被ばく医療総合研究所 放射線物理学部門 教授/アイソトープ総合実験室長 床次 眞司

特集3  
公認会計士現役合格

人文学部経済経営課程4年 布施 晶さん

広報PRページ

「弘大カフェ」オープン!

太宰治も学んだ旧制弘前高等学校外国人教師館がカフェに

卒業生紹介

NHK青森放送局 千葉 真由佳さん(人文学部卒)



# Contents



P01. COVER/クローズアップ 表紙の顔  
佐藤 雅未さん  
医学部医学科 5年

P02. 広報PR  
「弘大カフェ」オープン!

P03. 特集1 インタビュー  
「弘前大学で学んで良かった」と  
思われるような大学を目指して  
国立大学法人弘前大学 理事(企画担当)・副学長 吉澤 篤

P05. 特集2 インタビュー  
被ばく医療を通して地域貢献する弘前大学  
国立大学法人弘前大学 副学長(被ばく医療・COI担当) 柏倉 幾郎・放射線安全総合支援センター事務局長/学長特別補佐 藤岡 正昭・  
医学研究科 救急災害医学講座 教授/高度救命救急センター長 山村 仁・  
被ばく医療総合研究所 放射線物理学部門 教授/アイソトープ総合実験室長 床次 眞司

P09. 特集3 インタビュー  
公認会計士現役合格  
人文学部経済経営課程4年 布施 晶さん

P10. 卒業生紹介  
NHK青森放送局 千葉 真由佳さん (人文学部卒)

P11. HIRODAI TOPICS ひろだいトピックス

1. 弘前大学高大連携事業「ひろだいナビゲート・キャラバン in 函館」を実施
2. リンゴとチューリップのフェスティバル開催
3. 『弘前大学深浦エコサテライトキャンパス』開設に関する覚書を締結
4. テネシー大学マーチン校(UTM)トラベルスタディ
5. 「弘前大学表彰」表彰式を挙行
6. 在札幌中国総領事館 総領事 本学を訪問
7. 平川市との包括連携協定を締結
8. 「第1回ライブラリカフェ」を開催
9. 第7回弘前大学出版会賞表彰式を挙行
10. 「むつサテライトキャンパス」開講式開催
11. 北東北3大学3銀行による協定締結 (地域TLOネットピックスプラス)
12. 「弘前大学基金贈呈式」を行いました



## 「クローズアップ」 表紙の顔



今回は  
未来のお医者さん☆  
佐藤 雅未さんに  
インタビュー  
しましたよ



青森県立青森高校出身  
医学部医学科 5年  
佐藤 雅未 さん

### 弘前大学を選んだ理由を教えてください

将来働く病院で、充実した実習ができることはとても魅力的だと思ったからです。5年次は大学病院内の殆ど全ての科で実習しており、広い領域の疾患を診ることが出来ます。6年次は大学病院以外の病院でも実習することができて、医療に関するそれぞれの地域特性を学ぶことができます。

### 弘前の良いところを教えてください

弘前は城下町、学生の街として知られています。街並みが趣深く、レトロな喫茶店や建物が立ち並んでおり、とても魅力的で活気溢れる街です。また、春にはさくら祭り、夏にはねぶた祭り、秋は岩木山の紅葉、冬には雪燈籠祭りが行われ、四季の風景や自然も堪能できます。

### 卒業後の目標を教えてください

卒業後は県内の市中病院で研修を行い、各領域の知識を身につけ、基本的な疾患について診療できるようになりたいです。先輩医師や看護師をはじめとするコメディカルと協力し、患者に対していつも最善を尽くせる医師になりたいです。初心を忘れることなく、常に探究心と向上心を持って日々精進していきたいです。





# 「弘大カフェ」オープン!

弘前大学構内にある旧制弘前高等学校外国人教師館(国登録有形文化財及び弘前市景観重要建造物)は、大正14年に旧制弘前高等学校の外国人教師のための宿舎として建てられた西洋風建築物で、現在、弘前大学に残る旧制弘前高等学校時代の唯一の建物です。

これまで旧制弘前高等学校や卒業生である作家の太宰治に関する資料を展示・公開してきましたが、平成28年6月19日、この歴史遺産を活用して、弘前コーヒースクール(主宰・成田専蔵氏)の出店による歴史と文化の



香りが感じられるコーヒーハウスとして「弘大カフェ」がオープンしました。当日のオープニングセレモニーでは、佐藤敬弘前大学長、葛西憲之弘前市長の挨拶の他、創作舞踊や「紅い果実」によるコーヒー抽出パフォーマンス、太宰治作品の朗読など、様々な催しが行われました。終日、来場者全員にコーヒーが無料で提供され、5000人を超える人々が詰めかけました。

## デザインにも新しい風

弘大カフェのロゴデザインを手がけたのも弘前大学の学生です。大学院教育学研究科1年の今井紗友里さんの作品が最



優秀賞に選ばれ、建物の正面玄関上部に使われています。

店内にはテーブルとカウンターの全34席を用意。椅子やテーブルもすべてオリジナルデザインで、岩木山がモチーフに使われており、洋館の雰囲気にとびつたり。隣接した庭にオープンテラスが設けてあり、晴れた日には外で風を感じながら美味しいコーヒーを味わうことが出来ます。メニューはコーヒーのほか、サンドイッチやランチプレートなど。学割も用意されています。営業時間は午前10時から午後7時まで。日曜日と年末年始が定休。

## コーヒーの街、弘前を盛り上げる

出店者である弘前コーヒースクールの成田専蔵社長は、「私も弘前の街でコーヒーを学んできました。このカフェを弘前大学の『コーヒー学科』と呼ばれるような、文化や歴史を学べる空間にしたい。弘前市内に洋館カフェがたくさんあるので、コーヒー学会を誘致できるように取り組みを考えています。」と抱負を語りました。店内のエスプレッソマシーンは業界最高級とのこと、コーヒーの味にも自信をのせています。

## 太宰治も学んだ 旧制弘前高等学校

弘大カフェの入っている旧制弘前高等学校外国人教師館は、ドイツ語と英語を担当する教師がその家族とともに住んでいました。戦後は弘前大学の一般教官宿舎として使用されていましたが、県道の拡幅改修事に伴い、現在の場所に復元移築されたものです。

大正9年に開学した旧制弘前高等学校は、昭和22年まで文京町キャンパスに校舎や講堂、学生寮を建ち並べ、多くの卒業生を送り出しました。昭和2年入学の太宰治(本名・津島修治)もその一人です。当時の面影を伝える弘大カフェで、学都弘前の歴史に思いをはせてみませんか?





弘前大学  
理事(企画担当)・副学長

吉澤 篤

よしざわ あつし



特集1

「弘前大学で学んで良かった」と  
思われるような大学を目指して

国立大学法人弘前大学 理事(企画担当)・副学長 吉澤 篤

大学は単に勉強を教えるだけではなく、実社会、地域社会に役立つ教育が求められています。より質を高めた教育をしていくため、より素晴らしい人材を育成するため、弘前大学はどうあるべきなのかを、吉澤篤副学長に語って頂きました。

### 教育の真髄とは

まず、私自身が経験した大学時代の相転移―状態の不連続な変化―についてお話ししましょう。私は今から40年前に工学部合成化学科に入学しましたが、強い動機があったわけではありません。私の学生時代は教養部2年と学部2年に分かれており、教養部で学んでいた大学1、2年生の頃は、目的がよく分からないまま過ごしていました。私の専門は化学ですが、西洋史や国史などの歴史に関する講義がとて面白かったのを覚えています。また、下宿の部屋にはテレビは無く、本を読む習慣ができました。クラシック喫茶に通い、そこで読書や勉強など長い時間を過ごしていました。学部に進み3年生になると生活は一変しました。午前中は専門科目で午後は実験という毎日です。休みの日曜はレポートや宿題に追われました。しかし、3年生で無機化学の講義を聞いたときに高校ではあたかも暗記科目のように扱われていた化学が、量子論に基づいて見事に説明できることに講義室で心が震えた事を覚えてます。二つ目の相転移です。

「化学を飯の種にしよう。」  
4年生で研究室に入り、さらに大学院に進学すると新しい現象を創り出す事の面白さに取り憑かれました。ここでは、教科書のわかりやすい解説ではなく、何が重要で意義あることなのか、課題に対してどのようなアプローチするのか、ということ学びました。先生の研究哲学を刷り込まれたというべきでしょうか。夢の中にフラスコが出てきて、翌日の実験を夢で見ました。「プロの研究者になろう。」これが二つ目の相転移です。私は恩師から相当厳しく指導されました。しかし、学生である私は感じるのです。先生が単に私を見下して憂さ晴らしするかのよう怒っているのか、それとも何とか力を伸ばそうとして心を削って叱っているのかを、よく言われることですが、教員が学生を評価するのに3ヶ月かかるとしたら、どんなに成績の悪い学生でもその先生が自分たちのためを思って教えているかどうかは3日もあればわかると思っています。教育現場は緊張感のあるステージかもしれません。





さて、今までお話ししたことは40年前のことで、この履修モデルが今日通用するとは思いません。教員にはさまざまな業務が求められ、学生の気質も時代とともに変わってきました。しかし、教育の場であり、そこにいるのは教員と学生であることに変わりありません。私は十分に準備した講義を学生たちが正面から受け止めてくれる時や研究室の学生が目を輝かせて「化合物が出来ました」との報告を受けると、若者と一緒に学べる幸せを感じます。「教えるは学ぶの半ばなり」という言葉がありますが、教えるというのはより深く学ぶことだと思えます。

## 弘前大学の目指すところ

次に、弘前大学の大学改革の事をお話しします。平成28年度から向こう6年間の第3期中期目標・中期計画期間が始まりました。平成26、27年度の2年間で第3期に向けて様々な大学改革が実施されました。学長選考や学部長選考プロセスをあらためるガバナンス改革。文京町キャンパスの4学部

の改組、大学院の定員増等の教育研究組織の再編。教育研究院を設立し、教員組織と教育研究組織を分けました。これにより教員選考が全学的な視点でなされるようになりました。組織改組を先導するあたりで、平成26年度にはCOC事業、平成27年度にはCOC+事業が採択され、地域を指向した教育研究が推進されています。第3期中期目標・中期計画を検討するにあたり、今後の大学運営の基本となる将来ビジョンを学長自らが策定し、その中で弘前大学は「地域発展の中核的拠点」になることを宣言しました。それに基づいて6年間の目標とそれを実施するための方策を策定しました。そのなかでも特に力を入れる計画を戦略として以下の3つを定めました。「放射線科学と被ばく医療教育・研究の国際拠点構築」、「少子高齢化等に対応した社会医学的観点からの総合的教育研究拠点の形成」並びに「地域の特性を活かした持続可能な『青森型地方創生サイクル』確立の先導」です。弘前大学の取組は地域のニーズを踏まえ、食、環境およびエネルギーといった青森県の潜在力を活かす極めて特色あるものと認識しています。ただ、本学の大きな改革が平成26、27年度の短期間で行われたこともあり、今後の実行段階では計画時に想定されなかった問題が出てくると覚悟しています。それらをていねいに解決していくのが私のつとめでもあります。一方、大学の特色は多様性であり、過度の選択と集中が高等教育機関としての根幹を揺るがすのではとの危惧もあります。地域発展のための機能強化は弘前大学全体の向かう方向です。構成員の皆さんにはそのベクトルを認識していただきた上で自らはどうあるのかを考えていただきたいと願います。

地域を理解し、その発展に貢献出来る人が強く望まれています。大学の使命は、基礎となる学問を身につけ人間的魅力を備えた若者を社会に送り出すことだと考えます。学問はその道のプロである先生方が教え授けます。学生の皆さんは斜に構えず、真摯に学んで欲しいと思います。そうすれば自らの頭で考えることができるようになります。人間的魅力と言っても難しいことではありません。気持ちの良い挨拶が出来ると、これは相手を敬う気持ちを持っていることの証です。そして少々叱られてもへこまない強い頭になってください。繰り返しになります。弘前大学は地域創生の核になるべく大きく舵を切りました。授業ではケーススタディの例として青森を取り上げ、地域を知り理解するというプロセスや地域の課題解決へのアプローチを学びます。地域課題の解決には世界で何が起きているかの理解や国際社会とのつながりが必要になります。

## 最後に

弘前大学で身につけた方法論は他の地域や国外で活躍する場合にも必ず役に立ちます。受け売りですが、「先生」とは学生より先に生まれたからそう呼ばれるのではなく、学生より先に生き生きしているから先生なのだ。私は今年で還暦ですが、「先生」と呼ばれるべく結構無理をして元気な振りをしています。そうしてでも生きの良い学生と過ごすことは楽しいことです。入学時には何か頼りなげで人見知りだと自己紹介していた若者が、卒業する時には自信を持ち社会に巣立っていくのを見るのが喜びです。懐かし、楽しいだけの大学生活ではなく、卒業後10年経ち社会の中核として活躍する頃に、「弘前大学で学んで良かった」と言ってもらえるのが私にとって何よりの幸せです。



弘前大学 理事(企画担当)・副学長  
吉澤 篤 (よしざわ あつし)

平成12年4月 弘前大学教授採用  
平成22年5月 弘前大学機器分析センター長  
平成24年4月 弘前大学大学院理工学研究科長・理工学部長  
平成26年2月 弘前大学理事 (命：副学長)  
平成28年2月 弘前大学理事 (命：副学長)



# 被ばく医療を通して 地域貢献する弘前大学



東日本大震災をきっかけに、国からの被ばく医療に関する指定を受けた弘前大学は、その人材育成と体制づくりを進めています。それは、我が国にとって非常に重要な位置を占めていますが、そのために弘前大学はこれまでどのような活動をしてきたのでしょうか。「弘前大学放射線安全総合支援センター」の中心となって活躍する4人の先生方にお話を伺いました。



## 東日本大震災前から 被ばく医療がスタート

弘前大学が本格的に被ばく医療に取り組んだのは、平成20年から。遠藤正彦前学長が、原子力関連施設を数多く擁する青森県の地域的背景を考え、医療体制と人材育成を図り、「救命救急センター」を創らなければならないと、様々な機関に働きかけてきたからです。

被ばく医療がスタートして、まずは保健学研究科を中心に人材育成、そして、教育面の整備、職員の知識向上などに取り組みました。平成22年には「被ばく医療総合研究所」や「高度救命救急センター」を立ち上げ、さらに国の機関指定を受け、専門家エキスパートを養成する5カ年プロジェクトがスタートしました。

「当初、被ばく医療といっても、研究科で招集された委員会メンバーに放射線を専門とするのは私しかおりませんでした。そのため、アメリカミネソ州のトレーニングサイトへ研修に行ったこともあります。」と柏倉幾郎副学長は話します。

そうした中、平成23年3月11日に東日本大震災が起こりました。弘前大学は文部科学省の要請を受け、「被ばく状況調査チーム」を結成し、15日に第1次隊を派遣。放射線専門の教員、放射線技師、看護師、事務職員の計14名のチーム



機材を調達したのですが、出発する前日には、3号機の水素爆発がありました。短半減期の核種(放射性物質が別の物質に変化するのにかかる時間が短いものは1週間もすれば消滅してしま)うので、それがどれだけあったかを調査する必要もありました。」と被ばく医療総合研究所の床次眞司教授は当時を振り返ります。



## 人的貢献を中心に行った医療調査チーム

福島市には災害対策本部が置かれ、弘前大学のチームはその指示の下、県内を移動していききました。そこでの主

リーニングを行うこと。避難住民の体表面の放射線量が基準値以内であるかどうかを、ひとりひとり計測していくのです。

基準値を超える人はいませんでしたが、避難所には汚染検査済みの証明書を持っていないと入れません。正式な証明書が出来る体制になるまで、床次教授らはメモ用紙を破り、サインをして被災者へ渡していたといいます。

弘前大学ではその年の7月28日まで、要員を交代しながら「被ばく状況調査チーム」を福島県へ派遣します。この間、スクリーニング検査を行った数は5千人以上。床次教授は避難所での汚染検査をしながら、一方では環境試料



バイメーターで針が振り切れるほど高い空間線量を示すところもあり、チームの個人被ばく線量の測定結果では、床次教授が最も高い値を示しました。



「放射性物質が大気中に拡散している」というのは、通常ではありえないことでした。我々の想定を、はるかに超える事態が起こっていたのです。JCOの事故時でも局所的なものでしたから。」と柏倉副学長は言います。

※平成11年に茨城県東海村にある会社JCOの核燃料加工施設内で臨界事故が起き、3名の被ばく者を出した。

前大学でした。さらに、床次教授が事故直後に採取した環境試料は、学術的にも大変貴重なデータとなっています。

床次教授らが震災の二ヶ月後、4月11日に行ったのが、浪江町津島地区住民の甲状腺被ばく線量調査です。その頃になると、様々な核種が消滅していきますが、ヨウ素131(人間の体内に入ると、そのほとんどは吸収されることなく排出されるが、一部がのど仏の下にある甲状腺に集まる性質がある)の線量調査は、特に子供には影響が大きいといわれており、貴重なデータとなっています。同町役場の全面的協力の下で行われた住民の甲状腺検査データは、後にも先にも床次教授らが取ったデータが残っていないのです。





## 学内のプロジェクトチームで 浪江町の復興に

こうしたことから、同年9月、弘前大学は浪江町と連携協定を結び、学内に「浪江町復興支援ワーキング」を立ち上げました。そのなかでも、全国的に知られた活動が、18歳未満の浪江町の人たちから採血して行った染色体調査です。

津波を受けた浪江町は、中心居住区が今も更地状態で、被害を受けなかった山岳地域は放射性物質で汚染され、帰還困難区域になっているという状況ではありましたが、町の復興計画は進んでいます。浪江町の復興支援のために、弘前大学は被ばく医療総合研究所とともに農学生命科学部や理工学研究所、北日本新エネルギー研究所、白神自然環境研究所の教員が一体となって復興プロジェクトを立ち上げ、浪江町と密に関わっています。平成27年7月からは浪江町に弘前大学の「復興支援室」を設置し、国の支援を受けて保健師を常駐させ、リスクコミュニケーション事業をスタートさせています。

「みんながそれぞれ情報を共有し合い、課題を話し合っています。これからは知的、人的にも活動が活発になることは確かです。復興支援には雇用創出効果もあります。例えば、農学生命科学部の先生が、新たな再生エネルギー



を利用した産業を創り出すなど、期待をされている分野は多岐に渡ります。」と柏倉副学長は説明します。

また、福島での経験を単なる被ばく記録にしないために、これまでの様々なデータの蓄積を元に、環境問題や医療、人材育成など、社会に還元していく役割が弘前大学にはあるという思いを強めています。

## 国から評価された 取り組み

平成27年、弘前大学は原子力規制委員会から、「高度被ばく医療支援センター」および「原子力災害医療・総合支援センター」の指定を受けました。

「弘前大学では早くから被ばく医療に取り組み、教育研究、医療体制の整備、さらには福島で組織的な活動を行ってきたことが評価され、指定につながったのではないのでしょうか。被災

地でない弘前が選定されたというのは、そういう積み重ねの成果だと思えます。」と話すのは、高度救命救急センター長であり救急医療の専門医でもある山村仁教授。

国の原子力規制委員会から求められるのは、傷病者の受け入れ医療体制と、実際に被ばく災害が起きた現場に専門医や看護師、事務スタッフなどの派遣体制づくり。弘前大学が中心となって体制を整備し、さらに、被ばくした傷病者の受入に関しては弘前大学の「高度救命救急センター」が東北・北海道の被ばく医療の最後の砦となるのです。

## 全国にはない 医療体制づくり

この事業を事務局長として統括しながら、情報の発信と収集を行う役割を担っているのが藤岡正昭事務局長です。原子力規制委員会において「高度被ばく医療支援センター」及び「原子力災害医療・総合支援センター」の指定を受けたのは、全国で4つの大学と1つの研究所のみです。青森県にそのナショナルセンターがあるというのは、意味が非常に大きいと語ります。

「以前から新たな被ばく医療体制を構築する仕事に関わりたと思っています。任命されたからには、弘前大学



放射線安全総合支援センター事務局長/  
学長特別補佐

### 藤岡 正昭 (ふじおか まさあき)

平成21年4月 青森県健康福祉部医療業務課長  
平成23年4月 青森県健康福祉部次長  
平成25年4月 青森県西北地域県民局長  
平成27年4月 青森県中南地域県民局長  
平成28年4月 弘前大学放射線安全総合支援センター事務局長



副学長(被ばく医療・COI担当)

### 柏倉 幾郎 (かしわくら いくお)

昭和53年4月 北海道薬科大学助手  
平成8年4月 北海道薬科大学講師  
平成14年3月 北海道薬科大学助教授  
平成14年4月 弘前大学医学部保健学科教授  
平成24年2月 弘前大学被ばく医療総合研究所長  
平成26年2月 弘前大学理事(研究担当)・副学長  
平成28年2月 弘前大学副学長(被ばく医療・COI担当)





は北海道・東北が管轄エリアになり、そのネットワークづくりであり、学内の研究者の方々と連携して体制づくりをしていかなければなりません。とても責任重大な役割だと思っています。」

今、弘前大学では継続して人材育成をしていくため、保健学研究科に博士前期課程のみならず、後期課程にも専門の被ばく医療コースが設けられています。

「これだけの体制となると、全国にはない取り組みになると思います。裾野の広い多様な人材がこの活動に関わるといいう意味では、日本一と言っても良いかも知れません。ナショナルセンターに指定された以上、有事の際のために我々はいつでも対応出来る体制づくりをし、緊張感を持って取り組んでいく必要があるのです。」と柏倉副学長は今後の展望を見据えながら、熱い思いを語りました。

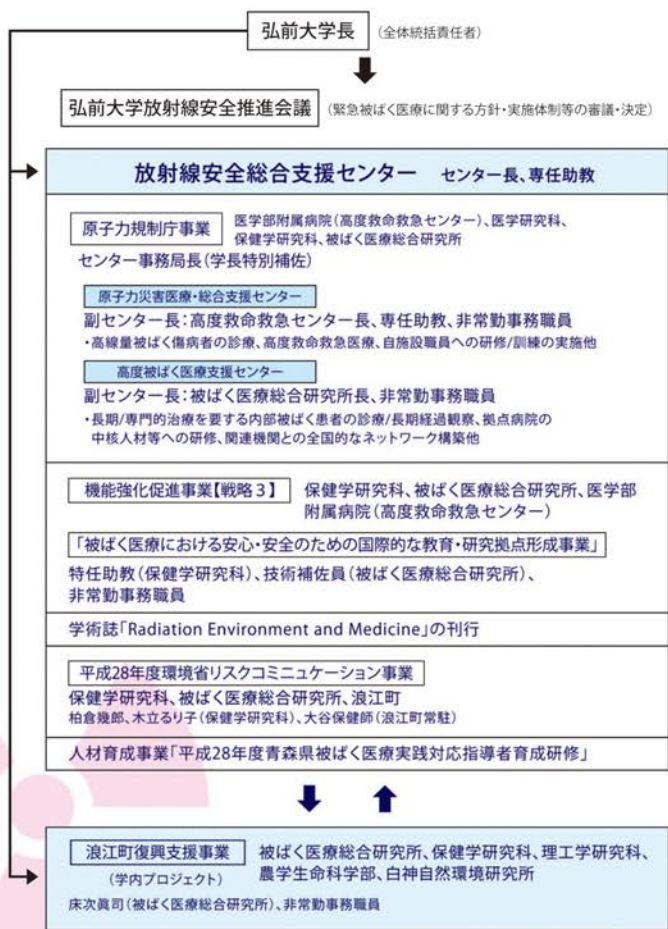
## 弘前大学放射線安全総合支援センター

弘前大学は、原子力関連施設を擁する地域的な背景を踏まえ、東日本大震災前の平成20年度から、被ばく医療体制の整備及び被ばく医療に関わる教育・研究ならびに人材育成に取組み、これまで多くの成果をあげてきました。震災後の原発事故対応では避難所での支援活動や様々な学術調査などが多くの貢献につながり、こうした被ばく医療への取組は弘前大学の意欲的かつ特色ある取組みの1つとなっています。

これまでに培われた人的、組織的及び学術的資源をもとに、平成27年8月に原子力規制委員会から原子力災害に対応する施設として「高度被ばく医療支援センター」及び「原子力災害医療・総合支援センター」の指定を受けるに至っています。この指定にあわせ弘前大学放射線安全推進会議の下に「放射線安全総合支援センター」を設置し、両センターの学内での活動体制を組織化しました。

また、平成28年度からの弘前大学の第3期中期計画・中期目標においても、「放射線科学及び被ばく医療における安心・安全を確保するための国際的な教育研究の推進」事業を、本学の3つの基盤強化促進事業の1つとして位置付け、引き続き重点的に取組むことを掲げています。さらには、東日本大震災後の平成21年9月に福島県浪江町と連携協定を締結し、それをもとに学内に学部横断的な「浪江町復興支援事業」がこれまで活動を続けると共に、平成25年度からは浪江町住民に対するリスクコミュニケーション事業（環境省）にも取組んでいます。

本センターは、これら被ばく医療に関わる様々な弘前大学の活動の相互連携を図りながら、国の原子力災害医療体制の一翼を担うと共に、弘前大学の教育・研究のさらなる発展に貢献して参ります。



被ばく医療総合研究所 放射線物理学部門 教授/アイソトープ総合実験室長

### 床次 眞司(とこなみ しんじ)

平成4年4月 早稲田大学理工学研究所助手  
平成6年4月 放射線医学総合研究所研究員  
平成23年1月 弘前大学被ばく医療総合研究所 教授  
平成28年4月 弘前大学アイソトープ総合実験室長

福島原発事故直後は住民の放射線被ばくによる影響を評価した。国際的には高自然放射線地域における住民の被ばくの実態調査を展開中。国際標準化機構(ISO)や国際電気標準会議(IEC)を通じて放射線・放射能測定に係る国際標準規格の策定に関与。



医学研究科 救急災害医学講座 教授/高度救命救急センター長

### 山村 仁(やまむら ひとし)

平成7年6月 大阪大学医学部 救急医学 研究生  
平成10年5月 NWRC, University of Manchester, Research Staff  
平成18年1月 大阪市立大学大学院 医学研究科 救急医学 講師  
平成19年7月 大阪市立大学大学院 医学研究科 救急医学 准教授  
平成27年4月 弘前大学大学院医学研究科 教授



# 難関「公認会計士」試験合格！三年次では初の快挙

## 誘惑を断ち切り一念発起

「学生生活四年間で何かを成し遂げたい。それが結果的に将来の仕事に役立てば」という思いがありました。大学入学後、弁護士や税理士などの資格取得を「何となく」考え始めたという人文学部四年（試験合格時は三年）の布施晶さん。「何となく」難関国家資格取得を考えたのは、獣医師を父に、薬剤師を母に持つ布施さんにとって特別なことではありませんでした。日商簿記一級の取得も考えましたが、一般的に、合格には約一年間の勉強で済んでしまうことに興味も湧かず、対象から外したといえます。

公認会計士に的を絞ったのは大学一年生の後期に入ってから。目標を定めてからは、所属していたバドミントンサークルを辞め、先輩や友だちからの誘いも断り勉強に打ち込みました。「断るのが申し訳なかったが、何度も誘ってくれたのは嬉しかった」と懐かしむ布施さん。（数ヶ月で誘われなくなったと明るく笑います。）

出身の北海道立帯広柏葉高校から弘前大学に進学したのは布施さん一人だけで、もし、高校時代の友だちが近くにいたり、都会の大学に進学していたら、遊びほうけて現役での合格は不可能だったのではと振り返ります。

## 苦ではなかった三千時間

公認会計士志望者は、一般的に専門受験指導学校で財務会計論や企業法などを学びますが、青森県内にはないため、通信教育で勉強しました。合格には三千時間以上の勉強が必要といわれる公認会計士試験。一日最低六時間は勉強し、「面白半分て実際に勉強時間を計ってみたら三千四十時間だった」とか。

公認会計士試験の難しさは範囲の広さがあると分析し、「公認会計士試験に限らず、勉強のコツはバランス感覚にあり、長期的な計画を立て、得意分野でも不得意分野でも満遍なく取り組むのが重要」と布施さん。気分転換は隙間時間に見るテレビとマンガ。特にマンガが好きで、寝る前に一冊だけマンガを読むことを楽しみに勉強に励みました。

## 弘前と札幌での二重生活

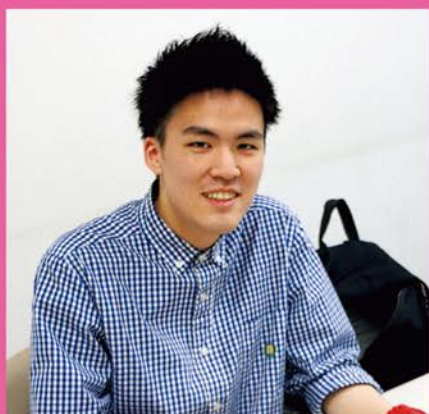
正式に公認会計士となるには、二年間の業務補助と三年間の実務補習が必要。そのため、月・火曜日はゼミや講義のために大学に通い、水・木・金曜日は業務補助のため大手監査法人の札幌事務所です。非常勤職員として働き、土曜日は実務補習のため札幌の補習所に通う多忙な日々を過ごしています。実務補習では一

コマ二時間半の講義を一日三コマ受講しますが、「三千時間の勉強よりもボリュームがあり、お腹一杯」と苦笑いしながらも満足げな表情です。

勉強に集中するためにアルバイトをせず、授業料や生活費の他、通信教育費総額約六十万円を負担してくれた両親に感謝し、非常勤職員として収入がある現在は、弘前・札幌での家賃と弘前札幌間の交通費を自分で払っています。札幌の監査法人を選んだのは、「東京の監査法人でひとつの会社を担当するよりも、地方で多くの会社を見て勉強した方が、自分の適性を早く見極められるから」。

布施さんは、公認会計士になった後のことまで見据えて勉強していたのです。札幌の監査法人では、布施さんの他に二名の同期がおり、年齢や学歴、職歴等も皆異なるため、会話も面白くとても充実している日々。現在は業務補助として顧客の決算書類をチェックしており、「監査にも金融や製造業、小売業など専門分野がある。自分に合った分野を見つきたい」と意気込みを語りました。

今後の活躍も期待しています！



人文学部経済経営課程4年  
会計学ゼミ所属  
布施 晶さん(ふせ あきら)

1994年北海道十勝清水町生まれ。北海道立帯広柏葉高校を卒業後、2013年4月に弘前大学人文学部経済経営課程に入学。1年次後期に司法試験に並ぶ難関国家試験、公認会計士試験への挑戦を決意。2年生で1次の短答式試験を突破。3年生だった昨年8月には2次の論文式試験に見事一発合格を果たす。現在は、ゼミや講義のため週2日を弘前で過ごし、週4日を札幌市内の大手監査法人で実務経験を積んだり、補習講義を受けたりといった超多忙な二重生活を送る。好きなマンガは「バガボンド」。



今回、ご紹介するのは、平成28年3月に弘前大学を卒業し、現在、社会人1年生として日々奮闘中の千葉真由佳さんです。アナウンサーの日常や弘前大学への思いを伺いました。

## 青森県でアナウンサーに

アナウンサーを目指したのは高校生の頃です。青森県で頑張っている人や、美味しいもの、おもしろいものごとを知りたかったのと、自分で取材やリポートも手掛けることができるのはローカル局ならではのと思い、地元のアナウンサーを目指しました。弘前大学人文学部現代社会課程に入学したのも、社会の出来事や動きを捉えられるようになりたいと考えたからです。就職は、青森県内のメディア業界しか考えていなかったため、就職浪人を覚悟して就職活動をしていました。最終的に内定をいただいたのが12月中旬だったので、当時は本当に焦りました。

## 「ミス・クリーンライス あおもり」として

在学中、お米のPRを通して青森県全体の魅力を伝えたいという思いで応募した「ミス・クリーンライスあおもり2013」に選ばれました。青森県産米のPRのため、青森県内はもちろん、全国各地で県産米の試食やステージイベント、各メディアでのPRなど、たくさんさんの経験ができました。いざ活動を始めてみると、青森県のイメージは「りんご」と「雪国」しかなく、「青森はお米も作ってるのね!」と驚かれました。実際は観光資源などもたくさんあるのに県外の方の抱く印象が薄く、あまり知ら

れていないことを痛感しました。そこで私は、イベントに来てくれたお客さんに津軽弁を用いながら説明したり、地図



「ミス・クリーンライスあおもり」として活動する千葉さん(左)と三村青森県知事(右)

を使いながら観光地の話をしたり、いかに青森の魅力を伝えられるかという一番の心がけました。この活動を通して青森県のことをもっと知ってもらいたいと思うようになったのです。また、学生だった私がこの活動を通してたくさんの方と関わることが出来ました。その時は「弘大生・大学生」としてではなく、社会人として接していただいたので、責任が伴う仕事で失敗が許されない状況に投げ出されてしまったかのような状況に戸惑うこともありましたが、その分、精神的にも成長できたと思います。その中で感じたのは、理解できないことがあったら、理解できるまで質問する、それが大事だということです。わからないままにしておく、同じことをするのにも倍の時間を費やすことになります。

## 社会に出てみて感じる 弘前大学の良さ

学生時代に所属していた社会行動コースでは、実際に地域に出て社会調査をしていたこともあり、私が今、仕事として携わっている取材やインタビューなどでその経験が役立っています。実践型の

カリキュラムが仕事に直結しているので、弘前大学に入学して本当に良かったと思っています。それから、なにかやるうとしたら幅広くなんでもできるのも弘前大学の良さです。私の大学時代の友人の多くは留学したり、自転車で日本縦断したりと、やりたいことを思い切ってやっています。そういった友人を見ていたおかげか、私も躊躇なく「ミス・クリーンライス」の活動など、学業以外のことにも積極的に取り組むことができたのではないかと思います。

## 弘大生へのメッセージ

目標や夢は隠さずにどんどん周りに言うべきです。そうすることで自分自身、有言実行できるように頑張るだろうし、その姿を見て応援してくれる人がきっと出てくるはずです。弘前大学では、そんな風に夢を持って、それを語り合える仲間に出会えました。みなさんも、弘前大学で仲間と過ごす時間を大切にして、夢に向かって頑張ってください。



### NHK青森放送局 キャスター 千葉 真由佳さん(ちば まゆか)

弘前大学人文学部現代社会課程卒。1993年青森県青森市生まれ。青森北高校を卒業後、2012年に弘前大学に入学。在学中には、学業の傍ら、青森県産米をPRする「ミス・クリーンライスあおもり」として活動。2016年、弘前大学卒業、NHK青森放送局入局。高校時代からの夢だったアナウンサーとして、現在は主に「情報ランチ」(平日11時50分より)、「あっぷるワイド」(平日18時10分より)内コーナー、中継リポートを担当する。好きなお米は「青天の霹靂」。

### ■千葉さんの一日

06:30 起床  
08:30 朝刊、ニュースのチェック  
10:00 出社・メイク入り・発声練習  
11:30 『情報ランチ』リハーサル  
11:50 『情報ランチ』本番  
12:30 昼ラジオ準備・本番  
13:00 昼食

14:00 『お国ことばで川柳』収録  
16:00 番組試写・視聴検討  
18:00 ラジオニュース原稿下読み・本番  
19:00 構成・原稿作成  
20:00 退社・同期や先輩方とご飯  
22:00 帰宅  
24:30 就寝



## 弘前大学高大連携事業”ひろ だいナビゲート・キャラバン in 函館”を実施

平成28年5月7日(土)、ホテル法華クラブ函館において”ひろだいナビゲート・キャラバン in 函館”を実施しました。

この事業は、高校生に「大学での学び」についての魅力発信と、将来の夢を「考え・描く」きっかけを提供するとともに、弘前大学を広く知っていただくため全学規模で地域に出かけていき、模擬講義、進学相談会、現役学生の体験談等を通し、弘前大学全体を紹介する高大連携事業のひとつで、平成27年度に新たな試みとして青森県内を対象に始まったものです。

当日は、対象地域の各高校から170人ももの高校生、教員、保護者の参加があり、模擬講義、現役学生の体験談の聴講や、進学相談会場では学部毎に設けられたブースで学部の特徴を熱心に質問していました。高校生にとっては、大学の学びを体験し、弘前大学をより身近に感じてもらおうよい機会となりました。



体験談を話す弘前大学の学生

## リンゴとチューリップの フェスティバル開催

平成28年5月7日(土)、8日(日)、農学生命科学部附属生物共生教育研究センター藤崎農場において、リンゴとチューリップのフェスティバルを開催しました。このフェスティバルは地域の皆様に農場の教育・研究および社会貢献の成果について知っていただくために毎年開催しているものです。

農場実習で学生たちが管理しているチューリップ園には、18品種12,000本のチューリップが咲きほこり、57品種1,200本のリンゴ樹も満開を迎え、農場を美しく彩りました。その結果、約2,400人のお客様に会場していただき、活況を呈しました。会場ではその他に、農場教員や技術職員による日頃の研究成果のポスター展示や紙芝居形式の研究紹介が行われ、チューリップやリンゴに関するたくさんの質問が寄せられました。

また、農場産品の販売コーナーでは、藤崎農場産のリンゴジャムやジュース、金木農場産のお米が販売され、長蛇の列ができました。



## 『弘前大学深浦エコサテライト キャンパス』開設に関する 覚書を締結

平成28年5月20日(金)、深浦町役場町民文化ホールにて、滞在型学習、公開講座、講演会等の実施や課外活動団体等による地域交流活動及び大学の各種紹介資料の配付などによる広報活動、その他地域の活性化に資する事業を実施することを目的として、深浦町と弘前大学深浦エコサテライトキャンパスを設置することの覚書を締結しました。

エコサテライトキャンパスの『エコ』のネーミングについて、世界自然遺産白神山や日本海など深浦町が持つ自然環境(エコロジー)並びに環境と調和した地域経済(エコノミー)の活性化を目指す意味があります。





## テネシー大学マーチン校 (UTM)トラベルスタディ

平成28年5月27日(金)から6月1日(水)の日程で、本学最初の国際交流協定締結校であるテネシー大学マーチン校(UTM)より、日本語専攻の学生9名と日本語教員のハモンド恭子氏が本学を訪問し、海外実習プログラム『トラベルスタディ』を実施しました。このプログラムは平成19年に開始され、今回が7回目の実施となります。

UTMの学生たちはプログラム期間中、弘前市在住のホストファミリー宅に滞在し、本学の講義への参加、弘前大学長表敬訪問、UTMに関するプレゼンテーション、UTM主催による感謝会などを行いました。

UTMの学生たちは、様々な交流活動を体験し、日本文化に対する理解を深め、充実した時間を過ごし、帰国の途につきました。



## 「弘前大学表彰」表彰式を挙

本学では、教育研究活動、課外活動の振興、医療活動、教育研究支援活動、大学改革の推進、社会活動、職員の模範となるような活動等において顕著な功績があった本学職員・団体及び本学との産学連携、社会連携又は教育若しくは文化活動において顕著な功績があった学外の方を「弘前大学表彰」により表彰しています。

今回は、学内・個人として飯島裕胤 人文社会科学部教授、廣田和美 医学研究科教授の2名、学内・団体として高度実践被ばく医療検討委員会、学内・団体及び学外・個人として赤い果肉りんご「紅の夢」普及推進委員会及び塩崎雄之輔 弘前大学名誉教授、学外・個人として



Paul Hollis 元弘前大学客員教授・非常勤講師)が「弘前大学表彰」により表彰されることとなり、平成28年5月31日(火)、総合教育棟大会議室において表彰式が執り行われ、佐藤学長から表彰者に対し表彰状及び記念品が授与されました。

## 在札幌中国総領事館 総領事 本学を訪問

平成28年6月9日(木)、在札幌中国総領事館 孫振勇総領事と唐璞 総領事夫人、金瀟 領事の3名が中国人留学生との交流を目的に本学を訪問しました。

孫総領事は平成27年5月現職に着任され、本学を訪問するのは今回が初。吉澤副学長・国際連携本部長と伊藤副学長・国際教育センター長を表敬訪問した後、中国からの留学生4名及び国際教育センターの鹿嶋彰准教授と懇談し、弘前大学での留学生生活の様子や今後の夢について質問したり、グローバルに活躍して欲しいと学生たちを激励したりと、会話が弾んでいました。

その後、弘前大学資料館や北溟寮を訪れ、本学の貴重な資料や改修された寮室を熱心に視察され、今後也是中国との友好関係が継続・発展することを期待して大





## 「むつサテライトキャンパス」 開講式開催

平成28年7月2日(土)、むつ市立図書館視聴覚ホールにて、平成27年に学校法人青森田中学園青森中央学院大学と共同で設置した「むつサテライトキャンパス」の開講式を開催しました。本サテライトキャンパスは、高等教育機関がない下北地域において、むつ市を中心に学生の滞在型学習、大学講義レベルの公開講座・講演会等の実施、大学の各種広報活動、その他地域の活性化に資する事業を実施することにより、賑わいの創出とともに、地方創生や人材育成等に貢献することを目的としています。なお、むつ市役所内にその機能を持たせ、むつ市内の建物において公開講座等を行うことにより、設備投資を削減し、既存の建物の利活用を図るという他のサテライトキャンパスにはない特徴があります。

開講式閉会後は、本年5月に日本考古学協会賞大賞を受賞した、人文社会科学部 関根達人教授による記念講演会「本州アイヌと地域社会」が開催され、参加者は和人とアイヌが共生する「多民族藩」の歴史・文化についての講演に聴き入っていました。



## 北東北3大学3銀行による協定締結 (地域TLOネットビックスプラス)

弘前大学(学長 佐藤敬)、秋田大学(学長 山本文雄)、岩手大学(学長 岩淵明)、青森銀行(頭取 成田晋)、秋田銀行(頭取 湊屋隆夫)、岩手銀行(頭取 田口幸雄)の6者は、地方創生の取組みとして、大学の持つ新技術を地域の中小企業と連携して活用するための新しい提携事業として「ネットビックスプラス」を立ち上げ、平成28年7月14日(木)、協定を締結しました。

1. 協定の目的  
6者は、3銀行のネットワークを活用し、3大学の研究成果等を地域社会に還元することによって産学連携を推進し、産業の活性化および地方創生を実現することで地域の企業等および地域社会の発展に寄与するため、相互に協力することを目的とする。

2. 提携協力事項  
(1) 3大学の保有する知的財産等、研究成果等情報の地域企業への提供  
(2) 3銀行の顧客企業が保有する技術的ニーズの共有と6者連携による解決スキームの提供

(3) 北東北3県の地域企業の新産業創出を目指した、産業振興および地方創生への支援  
(4) その他、目的を達成するために必要な事項



## 「弘前大学基金贈呈式」を 行いました

弘前大学基金は、本学の財政基盤の充実強化を図り、学生支援、教育研究活動等の一層の充実を図ることを目的に、昨年7月に創設しました。本学は、本基金を有効に活用し、地域を志向した大学改革を進め、地域活性化の中核的拠点としての本学の姿を確固たるものとし、イノベーション創出と人材育成を通じて地域社会への還元を目指しています。

このたび、本基金の趣旨にご賛同いただきました、青森トヨペット株式会社様から金1,000万円のご寄附をいただくこととなり、平成28年7月15日(金)に贈呈式を執り行いました。

贈呈式には、大野清隆会長、大野亮社長、高嶋賢治常務取締役が出席。大野社長が「県内23拠点で地域に支えられ、60周年を迎えることが出来た。未来を担う学生の学びの一助になれば、地元で人材育成を担う企業としても最大の喜び。」と述べられ、佐藤学長に目録を手渡ししました。

佐藤学長は「社会貢献の一環として多額の寄附をいただき、社会貢献を旨す本学としても有効活用させていただきます。」と謝辞を述べ、感謝状を贈りました。





## 平川市との包括連携協定を締結

平成28年6月17日(金)、平川市文化センターにて、相互の密接な連携と協力により地域の課題に迅速かつ適切に対応し、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展に寄与することを目的として、平川市との包括的な連携協定を締結しました。

調印にあたって、長尾平川市長から、平川市地域新エネルギービジョン策定や地方版総合戦略策定など、これまでの本学と平川市との取組が紹介され、「協定締結を機に、①平川市まちづくり推進事業、②礎ヶ岡地域の活用化に関する事業、③未来の担い手発掘・育成・支援事業、④『食ラボひらかわ』の利活用事業の4事業について熱度を高めるプログラムをしたい。」との挨拶がありました。引き続き、佐藤弘前大学長から、「地方国立大学としての役割を果たし、実質的な成果を創出させるように努力する。」との挨拶がありました。



## 「第1回ライブラリカフェ」を開催

弘前大学附属図書館では、昨年度開催した「ラウンジトーク」の後継事業として、平成28年6月24日(金)、オープンしたばかりの弘大カフェにて、「第1回ライブラリカフェ」を開催しました。医学研究科の中根明夫教授と医学生5名が、「感染症と社会問題」というテーマについて、コーヒーを飲みながら話し合いました。

感染症というテーマのため、天然痘からエイズ、インフルエンザまで様々な話題が繰り広げられ、地域包括ケアといった医学生ならではの専門用語も飛び出し、医学生の目線で話し合われました。聴きにいられた佐藤弘前大学長からは、多くの人が使っている「高血圧の薬」を例えにした話題が提供され、会場は大いに盛り上がりました。

当日直接見に来られない方のためにYouTube Liveで生放送したところ、91名の方が視聴されました(終了後、編集したものをYouTubeで配信)。



一方通行ではない先生と学生との語り合い。他学部生が加わることによりさらに話し合いの幅が広がり、ライブラリカフェが新たな交流の場となることが期待されます。

## 第7回弘前大学出版会賞表彰式を挙

弘前大学出版会では、平成25年1月から平成27年12月までに同出版会から刊行された21作品の中から、優れた作品を選定し「第7回弘前大学出版会賞」として表彰を行いました。受賞作品には、人文社会科学部部の黄孝春教授と平本和博氏の共著『りんごをアップルとは呼ばせないー津軽りんご人たちが語る日本農業の底力ー』が選ばれました。本書は、多彩な青森のりんご産業関係者への3年半にわたる丹念な取材・調査をもとに、多方面から検討を行って執筆されており、調査研究の成果が地域社会に生かされる事例としても意義が大きいものです。学術的厳密性を保つ記述スタイルでありながらも、一般読者への配慮を忘れることなく、専門家以外の読者にも読み物として楽しめるように工夫されており、地元書店週間ベストセラー等、地域の反響が大きかった作品でもあります。

### 第7回 弘前大学出版会賞表彰式



平成28年7月4日(月)、本学で表彰式を行い、佐藤弘前大学長をはじめ、学内外の関係者が列席しました。受賞者には、足達薫編集長から記念のガラス製表彰楯が贈られました。受賞作は、各誌に書評等が掲載されたほか、図書館協会選定図書にも選定され、全国に本学の研究成果を広く発信しました。りんごに関する総合研究力を有する本学にとって、地域に根ざした大学として取り組みの一端を内外に示した作品です。